56
142

事故本
欠ページ
P. 239-240
60. 8. 20

始

56
142

東京助醫女學校
校長醫學士 佐久間兼信纂著

産婆學教科書

第二卷 正規妊娠

56-142

産婆學教科書第二卷（正規妊娠）目次

（洋數字は獨習說明書頁數）

第壹編　妊娠の狀態……一五五…(149)

妊娠の定義及種類……一五五…(150)

第一章　胎兒附屬物の狀態……一五八…(158)

第一節　卵膜……一五九…(159)

一　脫落膜　二　外卵膜　三　內卵膜

第二節　胎盤……一六二…(166)

第三節　臍帶……一六五…(171)

第四節　羊水……一八六…(175)

第二章　胎兒の狀態……一七一…(181)

第一節　妊娠各月に於ける胎兒……一七一…(180)

第二節　成熟兒の頭蓋……一七六…(186)

大正9年7月 内交

一縫合　二顎門　三成熟兒頭徑經線及周圍
第三節　成熟兒と早熟兒との區別……一八〇…(190)
一形態による區別　二生活現象による區別　三胎兒附屬物による區別
第四節　胎勢、胎位、胎向……一八三…(195)
第五節　胎兒の營養及血行……一八七…(202)
一交流作用　二卵黃藜血行　三脈絡膜血行　四胎盤血行(胎兒血液循環)
第三章　妊婦生殖器(及其附近)の變化……一九一…(202)
第一節　生殖器(及其附近)の解剖的變化……一九一…(207)
一子宮　二輪卵管　三卵巢　四闊靱帶　五腟　六外陰部　七骨盤　八乳房
第二節　生殖器機能の變化……一九七…(210)
一月經　二排卵
第三節　子宮の膨大による影響及腹部の變化……一九八…(210)
第四章　妊婦全身に起る變化……二〇一…(213)
第貳編　妊婦診察……二〇六…(219)

甲部診察の方法……二〇六…(220)
第一章　問診……二〇六…(220)
第二章　外診……二〇七…(222)
第一節　全身の診察……二〇八…(223)
第二節　乳房の診察……二〇八…(223)
第三節　腹部の診察……二〇九…(225)
第一視診　第二觸診　第三聽診
第四節　骨盤の診察……二二四…(239)
第三章　內診……二二八…(246)
第一節　內診の方法……二二八…(246)
第二節　內診すべき順序……二二九…(247)
第三節　內診の目的……二三一…(250)
第四節　內診時の注意……二三三…(251)

乙部診斷事項……二三二…(256)

第一章　妊娠の決定……二三四…(259)
▲妊娠早期診斷法……二三七…(263)
▲妊娠と區別すべき類症……二三九…(267)
第二章　初妊と經產との區別……二四〇…(271)
第三章　妊娠時期決定法(分娩日豫定法)……二四四…(276)
第一節　問診によりて定むる法……二四四…(276)
第二節　外診及內診による法……二四六…(280)
第四章　胎位胎向の診斷法……二五四…(285)
第五章　胎兒數の診斷法……二五四…(286)
第六章　胎兒生死診斷法……二五五…(286)
第一節　胎兒生活現象……二五五…(286)
第二節　妊娠中に於ける死亡徵候……二五六…(286)

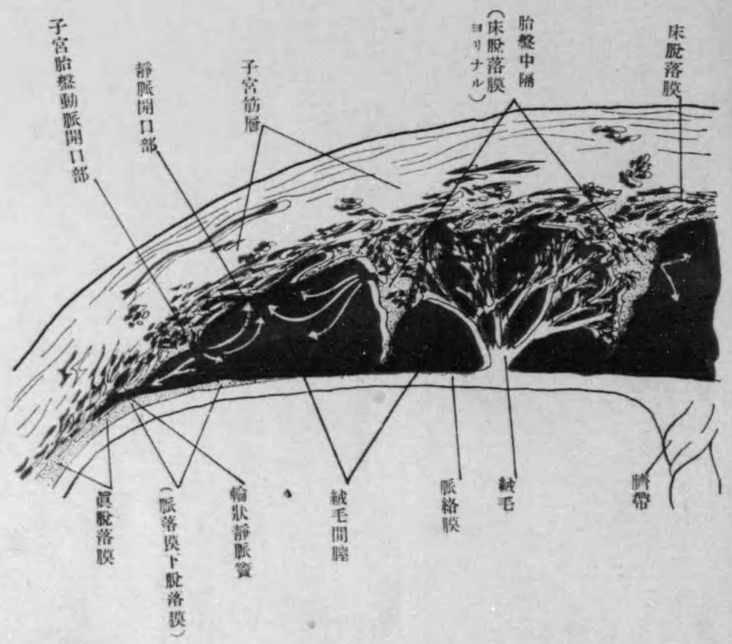
第參編　妊婦攝生法……二五八…(288)

第一章　運動……二五八…(288)
第二章　清潔……二六一…(289)
第三章　衣服……二六三…(293)
第四章　食物……二六四…(294)
第五章　住居……二六六…(299)

課外講義（獨習說明書）……(289)

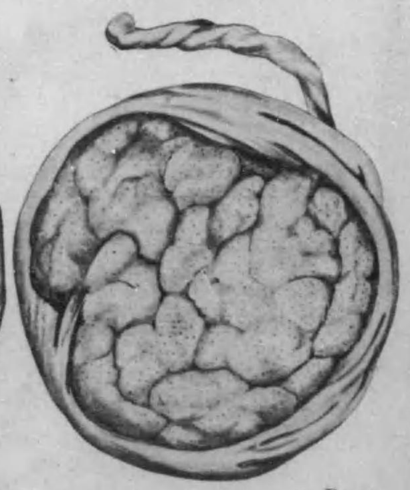
分娩に關する傳說と迷信……(289)
進化論と胎兒の發育……(291)
胎教……(292)
結肌帶の話……(294)

胎盤構造（縱斷圖）



胎盤胎兒面
（羊膜ヲ剥離シタリ）

胎盤母體面
（周圍ニアルハ外卵膜）



n. Runge

正規妊娠

第壹編　妊娠の狀態

妊娠の定義及種類

定義

妊娠とは、受胎したる卵子を婦人の體內に包容する狀態を云ふ。

種類

第一　胎兒の數によりて次の如くに分つ。

一　單胎妊娠

二　複胎妊娠　（一）雙胎妊娠　（二）品胎妊娠　（三）要胎妊娠　（四）周胎妊娠

妊娠の經過によりて次の如くに分つ。

第二　正規妊娠　卵子が子宮腔内に於て、約二百八十日間に完全に發育し、

一　異常の狀態無く、母體にも著しき障碍の來らざるものを云ふ。

二　異常妊娠　卵子が子宮以外の場所に宿るか、或は卵子に異常の狀態を伴ふか、或は母體に著しき障碍の來る場合を云ふ。

第壹章　胎兒附屬物の狀態

第一節　卵膜

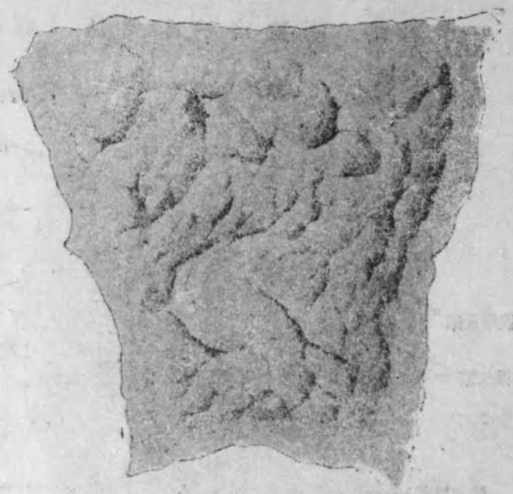
一　脫落膜

△受胎したる卵子が子宮體粘膜に附着するや、其表面に無數の細微たる絨毛を生じ之により子宮粘膜と固着す。これと同時に子宮粘膜は愈々肥厚して益々血管に富み以て脫落膜と變じ、其厚さ一仙米に達す。

△脫落膜に次の三種あり。

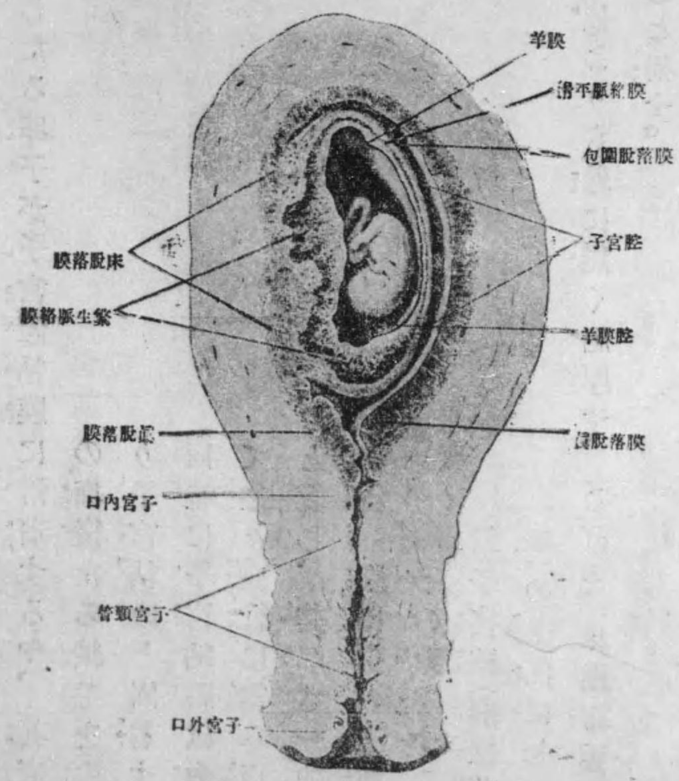
（一）卵子の附着する所は、通常子宮腔（前壁若しくは後壁）の上部にして、此部分は他よりも殊に能く肥厚す、これを「床脫落膜」（卵床脫落膜）と稱す。

第七十六圖
脫落膜（一ケ月末肉眼自然大）



第七十七圖

妊娠二箇月末子宮縱斷（自然大）



(二)卵子の附近の脫落膜は益々肥厚して、卵子を周圍より包圍するに至る、これを『**包圍脫落膜**』(包被脫落膜又は飜轉脫落膜)と云ふ。

(三)子宮腔內を被ふ其他の脫落膜を『**眞脫落膜**』と云ふ。

△包圍脫落膜は卵子の發育と共に薄くなりて、卵子が子宮腔內を全く滿すに至れば、これと眞脫落膜とが相接し、妊娠後半期に於ては兩者相癒着して其の境界を認めず。(分娩時にはこの包圍脫落膜が外卵膜の外面に附着して剝離す)

二　外卵膜一名絨毛膜又ハ脈絡膜

△妊娠の最初に於ては、卵子の全面卽ち外卵膜の全表面に、無數の細微なる絨毛を生ず。此絨毛內には毛細管ありて母體

第七十八圖
卵成完

の脱落膜中の血液より營養分を吸收す。

△然るに妊娠二ケ月に入る時は此絨毛は卵床脱落膜に相當する部分のみ盛に繁生し將來胎盤を形成するに至る(繁生脈絡膜)而して其他の部分は漸次に消失し始め、遂に妊娠四ケ月に及びては殆ど全く消失して滑平となる(滑平脈絡膜)。

三　内卵膜一名羊膜

第七十九圖
妊娠一箇月末卵子

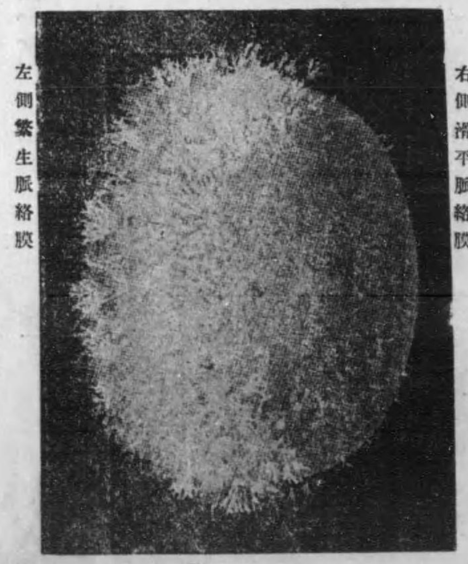
右側絨毛漸く失はれんとす

第八十圖
妊娠二箇月末卵子

左側益々繁生せんとす

彈力を有し比較的丈夫なる菲薄透明の膜にして、其の内面は甚だ平滑なり。

第八十一圖
妊娠三箇月卵子

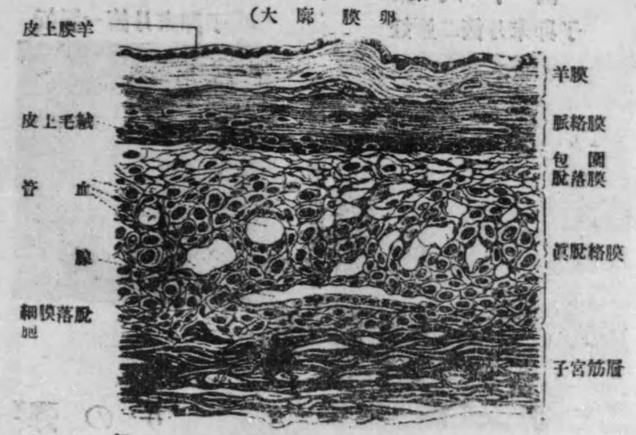


右側滑平脈絡膜

左側繁生脈絡膜

第二節　胎盤

第八十二圖（卵膜廓大）



一　胎盤の形成及構造

卵子表面の絨毛が漸次に消失すると同時に、床脱落膜に對する部分の絨毛のみ益々發育密生して、深く脱落膜の内部に侵入す。同時に脱落膜の組織が益々發育し、其の兩者が相合して胎盤を形成す。即ち、胎盤は胎兒の成分と母體の成分とが相集りて成るものなり。

この形成の終るは、通常妊娠三—四ケ月の頃なり。

二　胎盤附着の位置

受胎したる卵子が子宮腔内に入りて始めて附着したる部分が即ち胎盤の形成さる可き場所なり。此位置は子宮體上方の前壁又は後壁なり。

三　胎盤の形及質

形は圓形又は楕圓形にして扁平なり。中央は厚く邊緣に至るに從ひて薄し。其の質は恰も海綿の如く鬆粗なり。

四　大さ及び重量

直徑、一五—二〇仙米。厚、中央に於て三仙米。重量、平均五四五瓦。

五　胎盤の兩面

(一)**母體面**　其色暗赤色、表面粗慥凹凸不平にして、この面を不規則に走る溝により大小不同の小部分に分割せらる。此小部分を**胎盤分葉**といふ。この母體面には灰白色の結締織又は細かき石灰の沈着を見ること多し。

(二)**胎兒面**　其色帶青灰色、表面平滑にして羊膜を以て被はる。この面に臍帶附着し、其の附着點より多數の血管が胎盤の邊緣に向ひて放射狀に怒張蜿蜒す。

六　胎盤の機能

胎盤は胎兒の發育に缺く可からざるものにして、胎兒の呼吸作用、營養作用、及排泄作用を營むものなり。

卽ち、暗赤色の靜脈血を搬べる二本の臍動脈は臍帶を通じて胎盤に來り之に入り多數の枝に分れ、其末端は遂に絨毛內に於て毛細管となる。この場所に於ては、母體の血液との間に僅かに薄き膜を以つて隔てらるゝのみなるが故、其の膜を滲透して母體の血液より『酸素』及『種々の營養分』を取り、『炭酸』及『老廢物』を母體の血液に與へたる後、鮮紅色なる動脈血となりて靜脈管に入り、漸次に太き靜脈管に集り終に一本の臍靜脈となり臍帶を通じて胎兒に入り、これを養ひ其發育を全からしむるものなり。

三節　臍帶

一　臍帶の形狀及長さ

臍帶は胎兒の臍輪より出でゝ胎盤の胎兒面に附着する糾える

紐の如きものなり。其の長さは成熟胎兒に於ては平均五〇仙米、直徑約一仙米なり。

二　臍帶の捻轉

臍帶は多少捻轉し、左捻は右捻よりも少しく多し。左捻とは臍帶を己れの眼より前方に延し見て、時計の針と同じ方向に捻捩しつゝ眼の方に近づき來るをいふ。右捻はこれに反し、時計の針と同じ方向に眼より遠ざかり行くを云ふ。

三　臍帶の組織

臍帶の主なる組織は、ワルトン氏膠樣質にして、この中に二本の臍動脈と一本の臍靜脈を通ず。臍帶の表面は羊膜の連續なる薄き膜卽臍帶鞘を以て被はる。

第八十三圖　臍帶橫斷

第八十四圖　卵子

第八十五圖　卵子

四　臍帶の結節

(一)臍帶の一部分だけ膠樣質太くなりて瘤の如く突出したる時は之れを假結節といふ。

(二)臍帶が眞に結ばれたるを眞結節と稱す。眞結節は甚だ稀なり。

五　臍帶の胎盤に附着する位置

イ　中央附着

ロ　側方附着（偏倚附着）……最も多し。

ハ　邊緣附着

ニ　卵膜附着……最も稀にして異常に屬す。

▲以上卵膜、胎盤、臍帶は胎兒娩出後に共に排出せらる、これを後產、胞衣又は娩隨と稱す。

第四節　羊水

一　性質及量

(一)　色、妊娠の初期に於ては無色透明の液體なれども、後に至れば溷濁して白色又は帶黃色となり、一種の淡き臭氣を有す。

(二)　比重　比重は平均一〇一〇なり。

(三)　反應　弱「アルカリ」性なり。

(四)　成分　少量の蛋白質（及其分解物）、鹽類等。

(五)　分量　妊娠末期に於ては、五〇〇—一〇〇〇瓦

二　効用（價値）

甲　妊娠中の効用

(一)　卵膜と胎兒體部との癒着、又は胎兒體部相互の癒着を防ぐ

(二)　胎盤、臍帶、胎兒に及ぼす外部よりの壓迫を防ぐ。

其他の外來の襲力例へば衝突打撲等の刺戟を輕減せしむ。

(三)　胎兒生息すべき空間を作り其運動を自由ならしむ。

(四)　母體に及ぼす胎兒運動の影響を輕くす。

乙　分娩中の効用

(一)卵膜と共に**卵胞を形成**し子宮頸管を開大す。

(二)胎盤の**早期剝離**を防ぐ。

(三)臍帶・胎盤・胎兒等が陣痛の爲めに強く**壓迫**せらるゝを防ぐ。

(四)産道を粘滑ならしめ胎兒の**通過**を容易にす。

(五)産道を**清洗**する作用を有す。

三　羊水の起源

羊水は、母體及胎兒の兩血管系より來る。

假羊水

脱落膜と外卵膜との間、或は外卵膜と内卵膜との間に潴溜したる液體をいふ。これは妊娠中に時々流出し又分娩時に流出し羊水と誤ることあり。

第十二表　羊水と假羊水との區別

	羊水	假羊水
	毳毛、上皮、胎脂(時に胎糞)を混ず	同上を混ぜず
	排液後内診すれば既に卵胞を認めず	卵胞尚保存す

第二章　胎兒の狀態

第一節　妊娠各月に於ける胎兒

第一ケ月　身長〇、七仙米。　全卵子の大さ鳩卵大。

第二ケ月　身長三仙米。　全卵子の大さ鷄卵大。

此月の半に至るまでは人類の形狀を有せざるを以つて、これを『胎芽』と稱す。それより以後を『胎兒』と稱す。即ち、此頃

に至れば、頭部は軀幹より明かに分離し、二ヶ月の終よりは四肢も三關節に分る。

第八十六圖

第三ヶ月

身長八仙米。全卵子の大さ鷄卵大。

此頃より外陰部によりて男女の性を區別し得。

第四ヶ月

身長一五仙米。胎兒僅男女の區別愈明かにして。胎盤は既に形成せらる。

かに運動をはじむ。

第八十七圖

四箇月末胎兒

第五ヶ月

身長二四仙米。

(一)これまでは皮膚が血管を透見し得るほど菲薄なりしも、此頃より始めて皮下に脂肪現はれて厚くなる。

(二)又皮脂を分泌し、上皮の落屑をはじむ。此皮脂と上皮と相混じ胎脂を生ず。

(三)尙五ヶ月に於ては毳毛を生じはじむ。

第六ヶ月　身長**二九仙米**。體重**五〇〇瓦**。

頭髮は他の毳毛よりも長く太く濃く生ず。

第七ヶ月　身長**三四仙米**。體重**一〇〇〇瓦**。

此期に於て娩出する時は、甚だ微弱の啼聲を發し、數時間又は一二日にして死亡するを常とす。

故に此の時期以前の胎兒を『**未熟胎兒**』或は『不熟胎兒』といふ

第八ヶ月　身長**四〇仙米**。體重**一五〇〇瓦**。

此時は皮膚は紅色を呈し、毳毛密生し皺襞多く、顏貌老人の如し。

第八ヶ月以後十ヶ月の半までは、保育宜しきを得る時は成長し得るものなるを以て、これを『**早熟胎兒**』と稱す。

第九ヶ月　身長**四五仙米**。體重**二五〇〇瓦**。

皮膚の紅色少しく減じ、皮下の脂肪組織增加して幾分か肥滿す。

第十ヶ月　身長**五〇仙米**。體重**三〇〇〇瓦**。

十ヶ月の終りの二週間に於ては皮膚の紅色全く薄く、身體頗る豐圓となる。之を『**成熟胎兒**』といふ。

第十三表

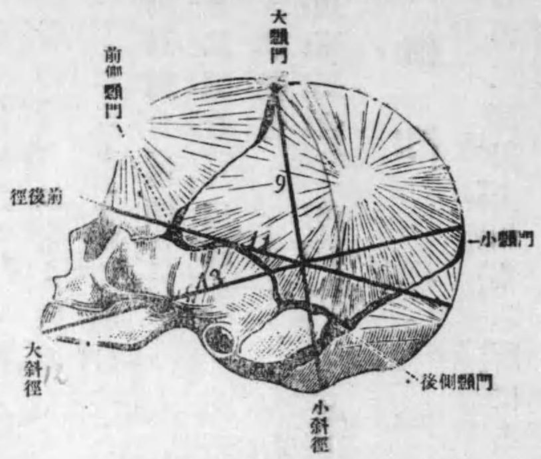
妊娠初期

全卵子と子宮の大さ

	全卵子	子宮
第一ヶ月	鳩卵大	鷄卵大
第二ヶ月	鷄卵大	鵞卵大
第三ヶ月	鵞卵大	手拳大

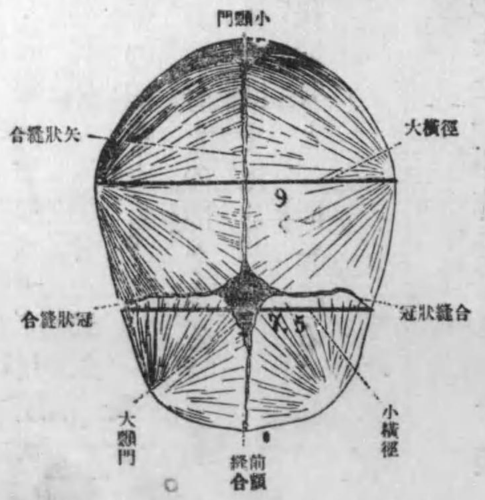
第八十八圖

成熟兒頭蓋（左側面）



第八十九圖

成熟兒頭蓋（上面）



第十四表　胎兒身長概算法

月數	身長	本邦人	
第1箇月末	1×1＝1仙米	0.7仙米	未熟兒
第2箇月末	2×2＝4仙米	3仙米	
第3箇月末	3×3＝9仙米	8仙米	
第4箇月末	4×4＝16仙米	15仙米	
第5箇月末	5×5＝25仙米	24仙米	
第6箇月末	6×5＝30仙米	29仙米	
第7箇月末	7×5＝35仙米	34仙米	
第8箇月末	8×5＝40仙米	40仙米	
第9箇月末	9×5＝45仙米	45仙米	
第10箇月末	10×5＝50仙米	50仙米	

第十五表　胎兒體重略數

月數	體重
第6箇月末	500瓦
第7箇月末	1000瓦
第8箇月末	1500瓦
第9箇月末	2500瓦
第10箇月末	3000瓦

第二節　成熟兒の頭蓋

一　縫合（衚縫）

頭蓋を形成する骨の名稱は大人と同樣なり（一卷二十六頁參照）只前頭骨が左右二個より成るを異とす。

頭蓋骨の縫合は大人の如くに著しく鋸齒狀をなさず。只膜狀の靱帶によりて緩く結合せらる、之を稱して縫合と云ふ。

(一) **前額縫合**（前頭縫合）……左右前頭骨の間を走る。

(二) **冠狀縫合**（冠處縫合）……前頭骨と顱頂骨との間を走る。

(三) **矢狀縫合**……左右顱頂骨の間を走る。

(四) **後頭縫合**（三角縫合）……顱頂骨と後頭骨との間を走る。

二　顖門

縫合の二個以上相集る所にある骨のなき一小部分、これを顖門と稱す。

(一) **大顖門**（前顖門）

前額縫合と、左右の冠狀縫合と、矢狀縫合との四線が相會合するところの菱形の大なる顖門をいふ。其前額縫合に連なる角は尖りて長し。

(二) **小顖門**（後顖門）

矢狀縫合と、左右三角縫合との三線が相會合するところの三角形の小なる顖門なり。成熟兒に於ては其の間隙を殆ど認め得ず。

(三) **側顖門**

(1) 前側顖門　冠狀縫合の外端にあり。

(2) 後側顖門　後頭縫合の外端にあり。

三　成熟兒頭の諸徑線及周圍

(一)前後徑(縱徑線)……眉間と後頭の最遠距離……一二仙米。
(二)小横徑……冠狀縫合の最遠距離……七五仙米。
(三)大横徑……左右顱頂結節間の距離……九仙米。
(四)小斜徑……大顎門の中央と項窩との間……九仙米。
(五)大斜徑……顎部尖端と後頭の最遠距離……一三仙米。
(六)水平周圍……前後徑を含む周圍……三三、五仙米。

第三節　成熟兒と早熟兒との區別

一　形態による區別……(第十五表)

	成熟兒	早熟兒
(一)頭蓋 (1)大さ	大、計測數前に示せる如し	小、計測數短小
(2)顎門・縫合	割合に小	割合に大
(3)頭蓋骨	相當に硬し	尚軟、時に指壓に應じて陷凹す
(二)身長	凡五〇仙米(一尺六寸五分)女兒の平均身長は男兒よりも稍短かし	第十三表に示す如し
(三)體重	凡三〇〇〇瓦(八百匁)女兒の平均體重は男兒のより稍輕し	第十四表に示す如し
(四)肩幅等	肩幅……一一仙米 腰幅……九仙米 肩胛圍……頭圍より大又は之と同じ	肩胛圍……頭圍より小
(五)皮膚 (1)色	淡紅色	深紅色
(2)皮下脂肪	充分に增加せる爲め顏面肥えて豐頰なり	皮膚に皺襞多く、顏面老人の如し
(3)胎脂	肩、胛部、其他皺襞に存するのみ	全身に附着す
(4)毛髮	頭髮は長さ三—四仙米にして密生す。毳七は軀幹の中殊に背部上方、肩胛部、上膊外面	全身一面に毳毛を生ず、

		のみに存す。顏面殊に額には毫毛なさを以て頭髮と額との境界明かなり
	(5)爪	相當に硬く指端を超ゆ	尙軟にして指端を超えず
(六)耳鼻	耳殼、鼻翼の軟骨は相當に硬くなるを以て明瞭に觸知し得	未だ軟なり
(七)臍	劍狀突起と恥骨接合との中央に在り	妊娠月數の早き程恥骨接合に近し
(八)外陰部	(1)男子	睪丸は陰囊の下方に在り	陰囊の上方に在り
	(2)女子	大陰脣發達して小陰脣を被ふ	大陰脣充分に發育せざる爲め小脣陰が其間より露はる

二　生活現象による區別……（第十六表）

	成熟兒	早熟兒
(一)分娩後直ちに高聲にて啼泣す	啼泣するも低聲なり
(二)眼瞼を活潑に開く	僅かに眼瞼を開閉する事あるのみ
(三)四肢の運動活潑なり	四肢の運動不活潑
(四)口中に指を挿入する時は直ちに强き哺乳運動をなす	哺乳力も弱く或は全く哺乳し得ざることあり
(五)分娩の際或は分娩後間もなく排尿及排便あり	通常排尿、排便、遲し
胎盤の大さ及臍帶の太さによりて大畧の時期を知り得	臍帶の膠樣質發育不充分なり

三　胎兒附屬物による區別……（第十七表）

第四節　胎勢、胎位、胎向

一　胎勢

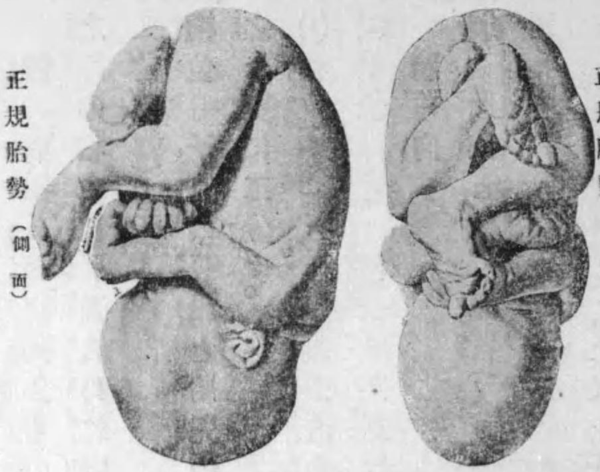
定義。胎勢とは、子宮内に於ける胎兒身體各部分相互の關係をいふ。

正規の胎勢は兒背が輕度に前屈し。兒頭は頤部を胸に近づけ。上肢は肩胛關節及び肘關節に於て屈曲しこれを胸の前におき。下肢は股關節及膝關節にて屈曲し、上腿を腹部に密接せしめ下腿は又上腿に接觸し、膝は前額に近け、足背は下腿に接し跟部は尾骶部に近づく。

▲以上の胎勢をとれば、胎兒の全形は、殆ど卵圓形をなし、其の兒頭が卵圓の尖端に相當し、臀部が其幅廣き部に相當す以上の卵圓形が恰も子宮腔の卵圓形に適合するものなり。

▲この胎勢に於ては、胎兒が其容積を最も小にしたる有樣にして其の兒頭より臀部まで連續せる線を**胎兒の長軸**といひ、其長さは身長の半にあたる。

第九十圖



正規胎勢（側面）　正規胎勢（前面）

二　胎位

定義。胎位とは、**胎兒の長軸**と**子宮の長軸**との關係をいふ。

區別。之を別つこと次の如し

(一) **縱位**（直位）胎兒の長軸と子宮の長軸と相並行するものをいふ。これを更に二分す。

(1) **頭位**。兒頭が母體の骨盤入口に向ふものを云ふ。

(2) **骨盤端位**。兒の骨盤端が母

體の骨盤入口に向ふものを云ふ。

△之等の場合に骨盤入口に向ひたる胎兒部分を**下向部**(**先進部**又前置部)と稱す。

(二)**横位**　子宮の長軸と胎兒の長軸と相交叉するものを云ふ。之を更に二分す。

(1)横位(狹意)……兩長軸が直角に交叉するものを云ふ。

(2)斜位……兩長軸が斜に交叉するものを云ふ。

三　胎向

定義。胎向とは、**兒背**(又は兒頭)と**子宮壁**との關係をいふ。

區別。

(一)第一胎向(縱位にては、兒背／横位にては、兒頭)が子宮左壁に向ふを云ふ。

(二)第二胎向(縱位にては、兒背／横位にては、兒頭)が子宮右壁に向ふを云ふ。

以上各胎向に於て更に次の如く分類す。

(1)第一分類(背前位)……兒背が少しく前方に向ふを云ふ。

(2)第二分類(背後位)……兒背が少しく後方に向ふを云ふ。

第五節　胎兒の營養及血行

受胎卵の漸次に分裂增殖して遂に成熟胎兒となるまでの間には、母體よりは一つの細胞をも受くることなし。其發育及成長は液體又は瓦斯體として母體より受取りたる營養分によるものなり。今其順序を次に述べん。

一　交流作用

胎芽が未だ固有の血管を有せざる間は、專ら子宮粘膜の液體が卵子の内に滲入し以つて之を營養す。

二　卵黄嚢血行

其後妊娠第二週の終り迄は、卵黄嚢の内に貯蓄せられたる營養物を攝取するために卵黄嚢血行が作用す。

三　脈絡膜血行

既に第二週の終りに至れば、脈絡膜の絨毛が子宮粘膜と結合し、此絨毛によりて攝取したる營養物は臍帶を通じて胎兒に達す。この血行を脈絡膜血行と稱す。

四　胎盤血行（胎兒血液循環）

胎盤に於ける絨毛毛細管内の胎兒血液は、絨毛間腔を流るゝ母體血液より營養素及酸素を得て動脈血となり、臍靜脈を通じて臍輪を經て肝臓の下面に來り、其一部は肝臓に入りて毛細管となり、主部はアランチ氏靜脈管を通じて下大靜脈に合し、其下大靜脈の靜脈血と混じ混合動脈血となり、更に肝靜脈の靜脈血をも合せ上昇して右房に注ぐ。其主部は卵圓孔を通じて左房に入り、肺靜脈より來りたる血液と共に僧帽瓣口を通じて左室に入り、之れより大動脈口を經て上

第九十一圖

胎兒血液循環略圖

行大動脈に入り、主部は大動脈弓より出づる所の無名動脈、總頸動脈、鎖骨下動脈を通じて頭・上肢等に分布し毛細管となり、之れより還流する靜脈血は上大靜脈を經て右房に注ぎ、其主部は下大靜脈より來れる血液の一小部と合して混合靜脈血となり、三尖瓣口を通じて右室に入る。此混合靜脈血は之れより肺動脈口を通じて肺動脈に入るや、其一小部は肺に至りて毛細管となり只肺を養ふのみにして（未だ呼吸の作用なく）集まりて肺靜脈となり左房に還流するも、肺動脈に入りたる血液の大部はボタリ氏管を通じて大動脈弓の末部に注ぎ、大動脈の血液の一部と共に下行大動脈内を下行す。其途中之れより分れたる血液は胃腸等に至り毛細管となり更に集まりて門脈となり肝臟に入る。下行大動脈の主部は左右總腸骨動脈に分れ、各は更に内外の腸骨動脈に分れ骨盤部・下肢等に分布し、毛細管となり集まりて下大靜脈に合し上行するも、左右内腸骨動脈の初部よりは各一本の臍動脈出で、臍輪を經て臍靜脈の周圍を圍りつゝ胎盤に達し、こゝに分枝し再び絨毛毛細管となり、老廢物及炭酸を母體血液に與へ同時に營養素及酸素を得て動脈血となり更に再び以上の循環を繰り返す。

第三章　妊婦生殖器（及其附近）の變化

第一節　生殖器（及其附近）の解剖的變化

一　子宮の變化

(一)大さ。第一ヶ月に鷄卵大、第二ヶ月に鵞卵大、第三ヶ月に手拳大、第四ヶ月に小兒頭大と云ふが如く、妊娠月數の進むと共に漸次に增大し。妊娠末期には腹腔の大部分を滿すに至り、子宮腔の擴さは平常の凡そ五百倍以上に達す。

子宮壁の厚さは凡そ五ヶ月迄は增加するも其後は增加せず。

(二)形狀。妊娠初期に於ては子宮の膨大は平等ならず、卵子の附着部分は强く膨隆す。其後第四ヶ月頃より漸次に平等となる。

子宮腔の形も漸く三角形を失ひ、倒卵圓形に變ず。

(三)各層。

(1)子宮外膜は子宮の發育に伴ひて其の面積を增し且つ肥厚す。

(2)子宮實質。筋纖維肥大增殖し、血管太く且つ迂曲す。

(3)子宮內膜。子宮體部の粘膜は脫落膜に變化する事前述の如し。

子宮頸管の粘膜は脫落膜とは異れども、亦肥厚して其の粘液分泌を增進す。

(四)子宮體部と腟部。

(1)以上の如く諸組織の變化によりて、子宮は搗き立ての餅の如くに軟くなる。殊に體部が先づ著しく軟となる。

(2)妊娠後半期に於ては腟部も軟となりて、其粘膜は藍赤色を帶ぶ。

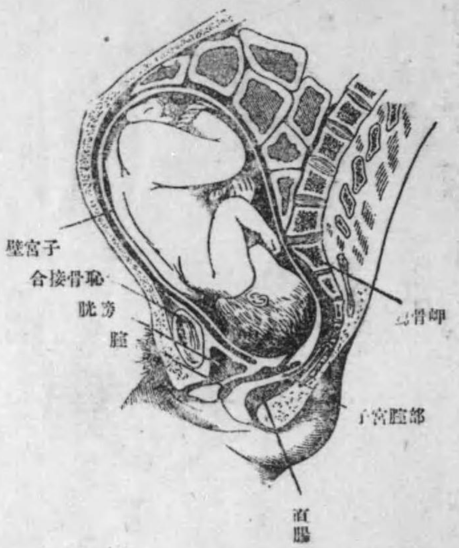
第九十二圖

ビスカツエツク氏徵候

(妊娠の進むと共に平等球形となる)

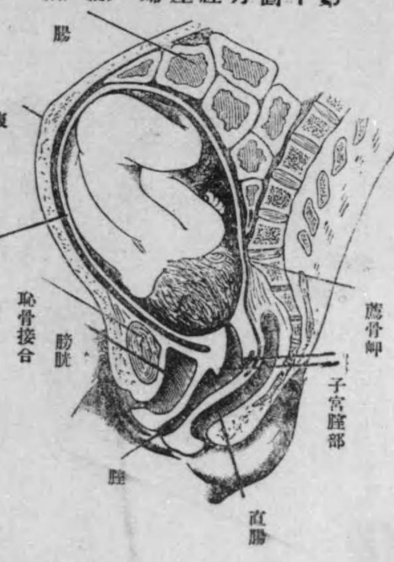
第九十三圖

第十箇月初妊娠(縱斷)



第九十四圖

第十箇月經產婦（縱斷）



(3) 子宮膣部は子宮が大骨盤腔に上昇すると共に上昇し、妊娠末期に至れば再び下方に降り殊に後方に向ふ。

(1) 子宮膣部は妊娠の進むと共に益々短縮し、殊に初妊婦に於ては妊娠の末期に之を全く觸れ得ざるに至る。これを**子宮膣部の消失**と稱す。

二　輸卵管の變化

子宮底が上方に丸く隆起する爲めに輸卵管附着部は平時より

は下方に位し、且つ輸卵管は垂直に近く走る。

三　卵巢の變化

卵巢も亦增大し、左右のいづれか一つには其の內部に丸き黃色のものを認む。之を**眞黃體**といひ（グラーフ氏膿胞より生じたるものなり。

四　濶靱帶及圓靱帶

子宮の發育に伴ひ延長し且つ肥厚す。

五　膣の變化

膣壁は、軟かく且つ鬆粗となり、又多量の粘液を分泌す。膣壁及膣口の粘膜も藍赤色に變ず。

六　外陰部の變化

陰脣は肥厚し、皮膚の着色强くなる。時に浮腫又は靜脈の擴

張を呈す。

陰裂哆開し、前庭の粘膜も藍赤色となり、分泌增加の爲めに其附近の粘膜粘滑濕潤となる。

七　骨盤の變化

骨盤部殊に臀部は妊娠三四箇月の頃より脂肪を增して益々肥滿す骨盤の關節は內に漿液の出づる爲めに緩みて多少可動性を增す。

八　乳房の變化

乳房には既に二ヶ月頃より變化を認む。

(一)乳體は膨滿緊張して、皮膚に妊娠線を生じ、又靜脈の擴張を認むることあり。

(二)乳暈は大となり、暗褐色となる。乳暈中にある皮脂腺卽ちモントゴメリー氏腺著明となる。（第五十三圖）

(三)乳頭は長く大となり、暗褐色となる。少しの刺戟により容易に勃起す。乳房を壓迫する時は乳頭の上に初乳を分泌す。

第二節　生殖器機能の變化

一　月經

月經は妊娠中閉止す。

稀には妊娠のはじめ數箇月の間に一回若しくは數回の月經樣出血を見ることあり。この場合には多くは少量にして、持續日數も亦短し。

二　排卵

妊娠中には通常排卵せず。

第三節　子宮の膨大に因る影響及腹部の變化

一　子宮膨大の影響

(一)膀胱壓迫の爲に**尿意頻數**を起す。

(二)直腸壓迫の爲に**便秘**を起す。

(三)靜脈壓迫の結果下肢・外陰部等に**靜脈の怒張**又は**靜脈瘤**或は**浮腫**を起す。

(四)神經壓迫の結果**神經痛**、或は**知覺異常**、或は**下肢運動の困難**等起る。

(五)橫隔膜壓迫の結果は次の如し。

(1)**呼吸短促**殊に僅少の勞働後呼吸促迫を來し第九ヶ月に於て其極點に達す

(2)**胃部壓迫**從て食物攝取の減量……

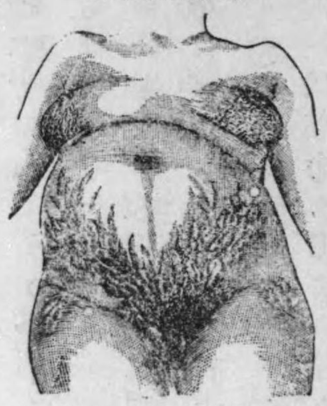
二　腹部の變化

(一)膨隆及妊娠線

(1)膨隆　妊娠初期には脂肪增加の爲に腹壁肥厚し。四ヶ月の頃よりは子宮增大の爲めに腹部隆起す。其後は子宮の增大に從ひ腹壁は益々延長せられ且つ菲薄となる。

(2)新妊娠線　眞皮の深層はこの延長に耐へず所々に線狀に龜裂を生ず。然れども之は通常の裂傷と異なり、上皮を以つて被はる、故に之を外表より見れば褐色又は帶青赤色の紡錘狀の線として認めらる

第九十五圖　妊娠線
乳房・腹部・大腿



此線を**新妊娠線**といふ。これは主として妊娠の終り三分の一期に來り殊に下腹部に多し。時には全くなきことあり。

大腿、臀部、乳房等の皮膚に於て急激に脂肪の增加したる時も同樣の線を生ず。

(3) 舊妊娠線　妊娠線は分娩後には細く白き線として殘り此線に細かき横皺襞を有するに至る。これを**舊妊娠線**(妊娠瘢痕)といふ。

(二) 臍窩。は第七ヶ月より徐々に淺くなり、遂には消失す。時としては却つて隆起することあり。

(三) 着色。腹部正中線は褐色に着色す。殊に臍窩より下方の正中線に著し。

第四章　妊婦全身に起る變化

一　體重

妊娠により體重を增加す。これ母體生殖器及卵子の增量によるのみならず母體自らも增量するものなり。

二　體溫

妊婦の平均體溫は、平時よりも二―三分高し。

三　血行器

(一) 心臟。は少しく大となる。

(二) 脈搏。は平均八十を越ゆる事あり。

(三) 心悸亢進、眩暈、逆上等。は妊娠初半期より既にあることあり

四　呼吸器

(一)鼻。鼻粘膜の充血を來し、衂血を起すこと稀ならず。
(二)喉頭。聲音時に粗慥となることあり。
(三)肺臟。子宮の膨大の結果横隔膜上昇し、爲めに呼吸短促を來すは前に述べたる如し。

五、消化器

(一)齒牙。既に齲齒あるものは速かに增惡することあり。
(二)食慾。は時に甚だしく減退することあるも、通常は軈て增進するものにして殊に後半期に於て增進著し。
屢々嗜好の變化を來し、時には食品以外のもの例へば土、石油等を好むことあり。
(三)惡心及嘔吐。は妊娠中に時々起ることあるものにして、妊娠前半期に於て多く且つ强く、殊に每早朝空腹時に於て來ること多し。これによりて始めて妊娠を覺ること少なからず。
(四)唾液分泌。多少增加し、時に甚だしきことあり。多くは嘔氣又は嘔吐と同時に來る。
(五)便秘。妊娠中は便秘し易し。

六、泌尿器

尿中に蛋白質を極めて少量混ずることあり。
尿意頻數を起し易し。

七、皮膚

(一)顏面の皮膚。多くの妊婦は顏面の皮膚に新鮮なる活色を失ひ、眼の周圍に褐色輪を生ず。
(二)皮膚着色。皮膚殊に乳暈、乳頭、腹部正中線、外陰部の皮膚は漸

次に暗褐色となり、甚だしきは暗黑色となる。顏面殊に前額、鼻背等に不規則形の褐色斑點を生ず。これを子宮褐色斑といふ。

其他皮膚の瘢痕に着色することあり。

(三)妊娠線。腹部殊に下腹部、乳房、大腿、臀部等に於てこれを見る(委細は前條を參照す可し)

(四)皮下靜脈の擴張。乳房又は其の附近、腹壁、外陰部、下肢等に於て、皮下靜脈擴張す。甚だしき時は下肢外陰部に於て靜脈瘤となる。

(五)浮腫。下肢、外陰部、下腹部等の皮膚に於て來ること前述の如し。

八　神經系統

(一)末梢神經の障碍。頭痛、齒痛、關節痛、薦骨痛等の起ることあり又嗅覺異常、味覺異常、輕度の視力障碍等の來ることあり。下肢等に知覺異常運動障碍の起ることもあり。

(二)精神の障碍。精神過敏となり、忽ちにして悲み忽ちにして喜ぶ等感情の變化甚だしく。或は憂鬱に傾き、平常快活の婦人も極めて眞面目に變ずることあり。之れに反し頗る快活に變ずる婦人あり。

九　姿勢

腹部の膨隆するに從ひ重心前方に移るが故に、これを平均せしめんが爲、直立又は歩行の際に上體を後方に引く姿勢を取るに至る。

第二編　妊婦診察

甲部　診察の方法

第一章　問診

一　住所、姓名、年齢、職業

二　親近者の健否

三　小兒期の疾病の有無

四　月經の有様
- (一)初經の年月
- (二)其後の經過
  - (1)順調なりや否や
  - (2)持續日數
  - (3)分量
  - (4)月經痛其他の異常

五　初經後の重なる疾病

六　既往妊娠、分娩、産褥の狀態
- (一)何回なりしや
- (二)分娩時の妊娠月數
- (三)分娩の難易、其他の異常

七　今回の妊娠經過
- (一)最終月經の時期及平常月經との比較
- (二)胎動を初めて感じたる時期
- (三)惡阻の有無

第二章　外診

外診の法に視診・觸診・聽診・測診の四種あり。此法を行ふに全身(下肢を含む)乳房・腹部・骨盤の各部に分つを便とす。

第一節　全身の診察

一　身長、骨骼殊に脊柱の狀態

二　營養の良否。

三　皮膚
　(一)血色、着色、發疹（顏面にては、顏貌及褐色斑）
　(二)冷熱、乾濕、
　(三)浮腫、靜脈瘤（殊に下肢に注意）

四　體溫、脈搏、呼吸

第二節　乳房の診察

一　乳體
　(一)大さ及形狀
　(二)皮膚の瘢痕及妊娠線

二　乳暈
　(一)大さ及着色
　(二)裂傷又は瘢痕

乳頭
　(三)乳頭の哺乳に適するや否や

三　乳腺
　(一)發育の良否
　(二)硬結の有無
　(三)初乳を壓出し得るや否や

第三節　腹部の診察

先づ排尿後餘り軟かならぬ布團の上に仰臥せしめ、脚を揃へて胯關節及膝關節に於て輕く屈曲せしめ、腹部を全く露出し陰部及下肢は毛布の類を以て被ひ、產婆は妊婦の通常右側に來り兩手を靜かに腹部にあて診察す可し。

注意

(1) 妊婦自ら排尿したりと云ふも、尚膀胱内に殘るともある故注意すべし。

(2) 診察時には、必要以外の體部を露出せしめざる樣注意す可し。

(3) 冬期は産婆の手を溫めたる後觸診すべし。

第一　視診

一　膨隆の度及形狀

二　臍窩の狀態

三　正中線着色の度

四　妊娠線の有無及新舊の區別

五　胎動を視診し得るや否や

第二　觸診(按診)

第一段の方法

先づ産婆の顏面を妊婦の顏面に向け、兩手の指を伸べ揃へ、其小指緣を子宮底部にあて、此處を靜かに壓す可し。

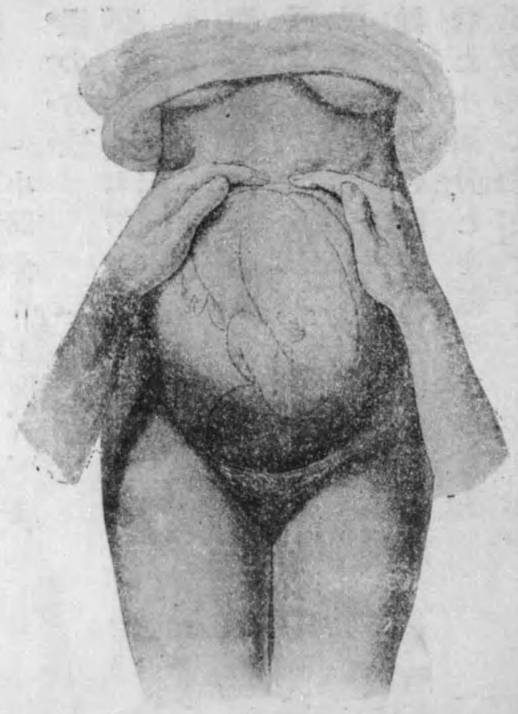
これにより定むべきこと次の如し。

一　腹壁殊に心窩部腹壁の弛張。

二　子宮底の高さ

三　胎兒部分の區別(通常臀部)及大さ

第九十六圖
腹部觸診(第一段の法)



▲胎兒部分（大部分＝兒頭、臀部、兒背　小部分＝上肢、下肢）

第二段の方法

第一段の時と同樣の方向に坐し、手を徐々に側腹部に移し、次の四項を診る可し。

一　腹壁の厚薄及弛張。

二　子宮の大さ及形狀。子宮壁の厚薄及弛張殊に其收縮。

三　羊水の量。

四　胎兒部分の區別（通常兒背と小部分）及胎動の有無。

▲兒背と小部分とを區別する方法

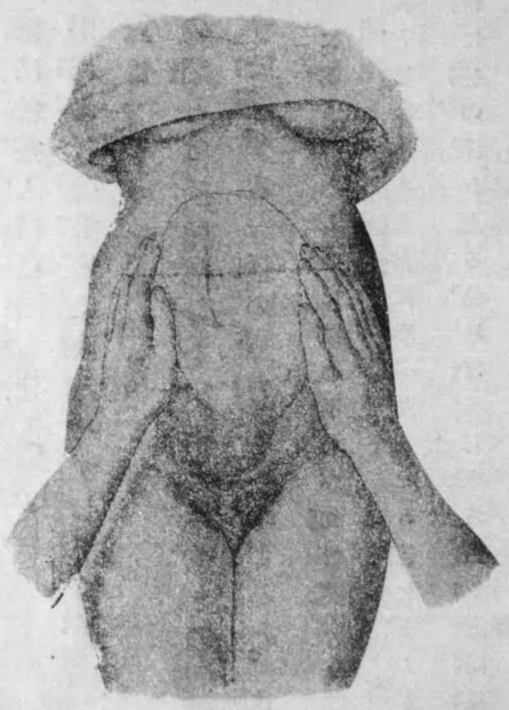
兒背は弓狀に彎曲せる、一樣の硬度を有する、細長き抵抗物として觸る。

小部分は兒背の反側にありて、小なる硬き棒片樣のものとして觸れ、容易に移動す。

第三段の方法

一方の手を用ひて拇指と他の四指との間を十分に開き恥骨接合の上方に於て、胎兒の下向部をこの拇指と四指との間に挾み、次の狀態を見る可し。

第九十七圖
腹部觸診（第二段の法）



一　胎兒下向部が「何」なりや。

二　胎兒下向部が骨盤入口より上方に於て**移動**するや。（或は既に骨盤入口に固定せるや。）

兒頭が尚未だ骨盤内に嵌入せずして移動する時は兒頭に**浮球の感**（**バロットマン**）を覺ゆ。

浮球の感とは胎兒部分を拇指と示指との間に挾み之を左右に動かす時感ずる一種の彈力性反動を云ふ。或は兒頭を指端にて内部に衝き込みし時に跳ね返るが如き感あらば、これ亦浮球の感なり。其有樣は恰も水上に浮べたるゴム毬を上より水中に衝き込みたる時に毬の浮き上る爲め反動し來る感覺と同樣なるを以て浮球の名あり。

第十九表　兒頭と臀部との區別法

	兒頭	臀部
(1)	平等に硬し	不平等にして兒頭より軟かなり
(2)	球形をなす	不正形
(3)	臀部より大なり	兒頭より小なり
(4)	浮球の感あり（骨盤内に固定せざる時に）	浮球の感なし（ありても甚だ不明）

第四段の方法

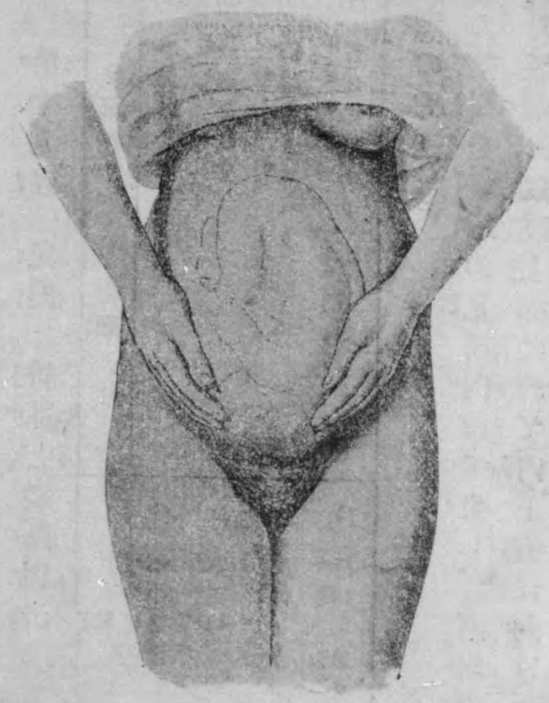
産婆の顏面を妊婦の足に向けて坐し、兩側の手指を揃へて其指尖を妊婦の鼠蹊上部に於て内下方に向け、徐に骨盤腔内に深く壓入し、下向部を次の如く綿密に診察す可し。

一　下向部は「何」なりや。

之は既に第三段の法にて定めたるを、尚一層確定せんとするなり。

二　下向部は「如何樣」に骨盤腔内に進入せるや。

第九十八圖
腹部觸診法（四段の法）



此有樣を定むるには、其下向部の中にて例へば後頭部、項部、前額部、頤部等を區別して兒頭の方向を定めざる可からず。

(一)**後頭部**は後頭結節により定め得。

(二)**項部**は後頭位に於ては、平坦にして直に後頭結節に連る。

(三)**前額部**は圓形を帶び、後頭と反對の方向にあり。

(四)**頤部**は硬き三角形の突起として觸る。

三　下向部は「何處」迄下降せるや。

既に骨盤腔内に深く嵌入せしや、若し然らば何れの邊迄進みしや。

四　下向部の「大さ」及「硬さ」

之を定め、同時に胎兒全身の大さをも考へ合す可し。

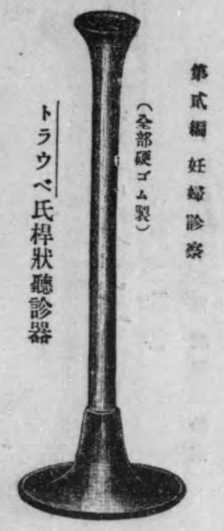
第三　聽診

第九十九圖

フリユーデンタル氏
桿狀聽診器

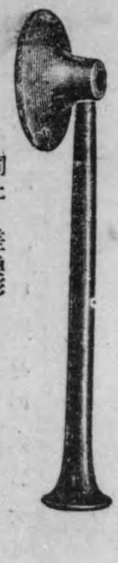
一　聽診の方法。聽診時には凡て妊婦の下肢を伸さしめ、周圍を靜かにして、專

第百圖



トラウベ氏桿狀聽診器（全部硬ゴム製）

第百一圖



同上　差換形

心一意之に從ふべし。

(一)直接聽診法　產婆自らの耳を妊婦の身體に直接にあて、或は淸潔なる布を間にはさみて聽診する方法なり。

(二)聽診器

(1)トラウベ氏桿狀聽診器　硬護謨製、水牛製、象牙製等あり。

(2)兩耳聽診器。

二　聽診によりて聽取す可きもの次の二表の如し。

甲　胎兒より發するもの（第二十表）

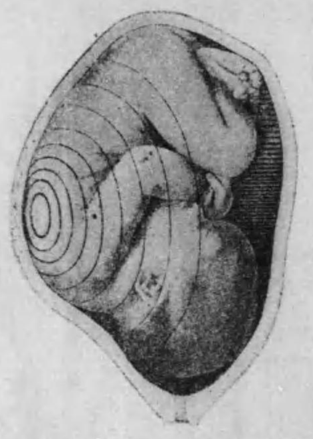
	(一)胎兒心音	(二)臍帶雜音	(三)胎動雜音		
(一)時	妊娠第五ヶ月末より	妊娠後半期、稀に聽ゆ	妊娠第四ヶ月末より		
(二)場所	胎兒胸廓が子宮壁に最も近接する場所に最も著明	胎兒心音の最も良く聽ゆる所、或は其附近	不定		
(三)數	一分間一二〇——一四〇	心音數と等し	不定		
(四)性質	復音	出沒、强弱共に變動し易し。絲鳴樣	衝突樣短音（運動を耳に觸知し得）		
(五)因原	心臟の搏動	臍帶血管の輕き壓迫	胎兒の運動		

乙　母體より發するもの　（第二十一表）

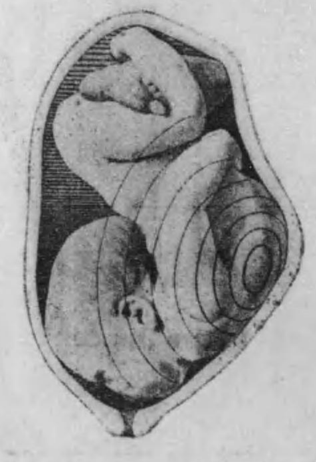
	一）大動脈音	（二）子宮雜音	（三）腟管雜音		
（一）時	不定	妊娠第三四ケ月の頃より	不定		
（二）場所	腹部中央	子宮下部（通常兩側）	不定		
（三）數	母體脈搏と同數	母體脈搏と同數	不定		
（四）性質	心音に類す	變化し易し	雷鳴樣 泡末の消ゆる樣其他種々		
（五）原因	腹部大動脈の搏動	子宮の太き動脈管內の血流	腸の蠕動		

第四二圖　胎兒心音傳達の狀態

第二後頭位

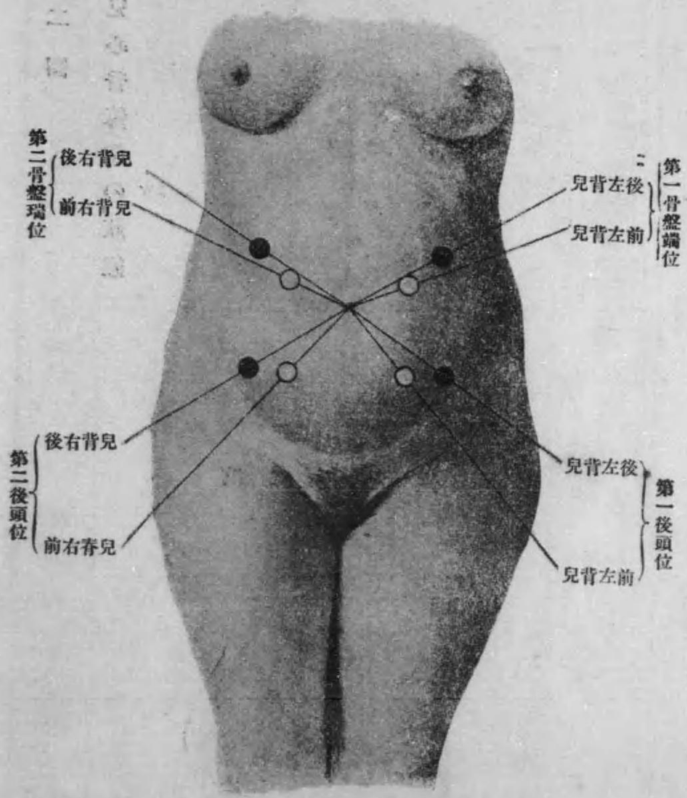


第二顏面位



第百三圖

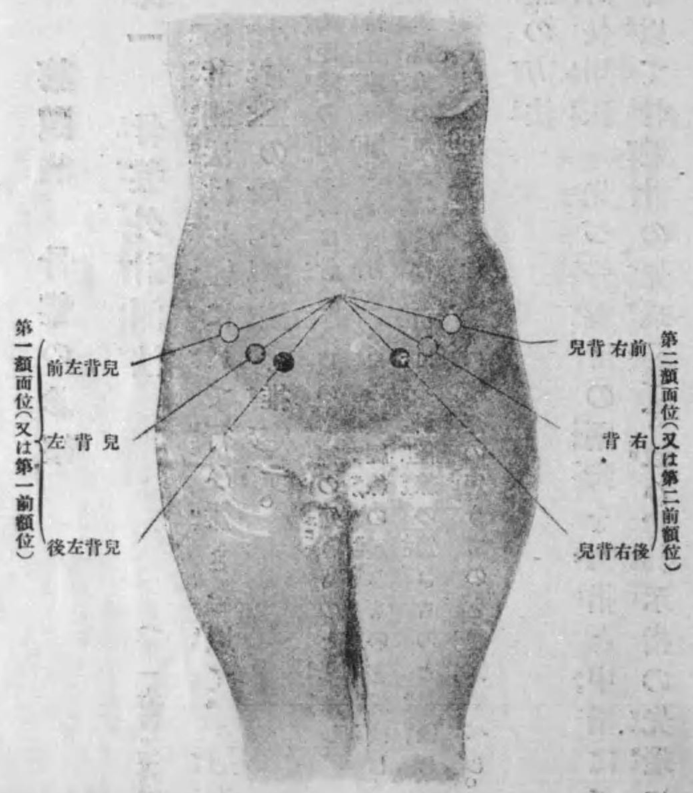
胎兒心音を最も明著に聽取し得る部位



（○は前、●は後）

第百四圖

胎兒心音を最も明著に聽取し得る部位



第四節　骨盤の診察

第一　骨盤外計測法

（第一卷四二頁參照）

一　目的　內計測法は生體に於て行ひ難きを以て、通常外計測法により小骨盤の大小廣狹を推定す。

例へば、櫛間距離の短き時は、骨盤入口の横徑の短きものと想像し。

外結合線の短き時は、骨盤入口の縱經線の短きものと想像し。

外斜徑線の短き時は、骨盤入口の斜徑線の短きものと想像し。

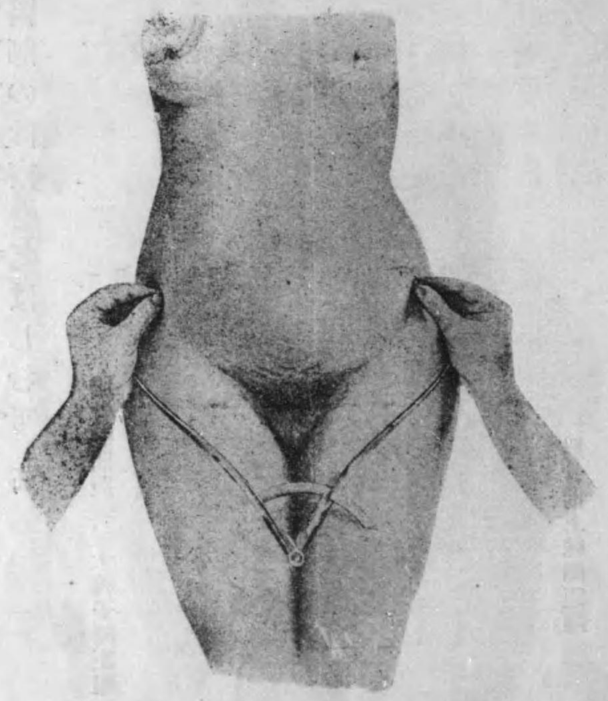
大轉子間の短き時は、骨盤濶の横徑の短きものと想像すべし。

二　計測の方法

(一)骨盤計使用法　先づ骨盤計の兩脚を拇指と中指にて支持し示指を以て骨盤計の先端(鈕)を被ひ、其示指の先端にて計測

第百五圖

腸骨前上棘間距離計測の狀態



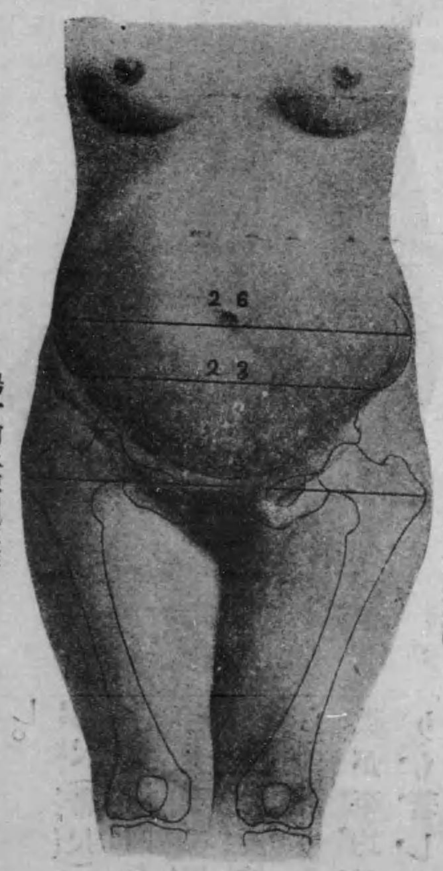
點を求め、此點に鈕を貼て度目板の度を讀み以て其鈕間の距離を知るべし。

(二)卷尺(帶尺)は骨盤周圍を測定するに用ふ

三　注意　產婆自らの計りたる數が平均數よりも著しく短かき時はこれを狹窄骨盤と

考へ醫師の診察を乞はしむ可し。

第百六圖

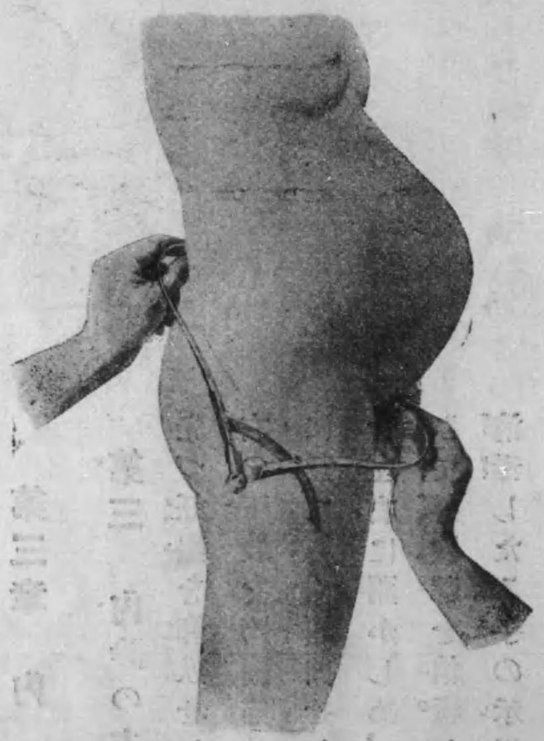


腸骨櫛間距離、大轉子間距離

腸骨前上棘間距離

第百七圖

外結合線計測の狀態

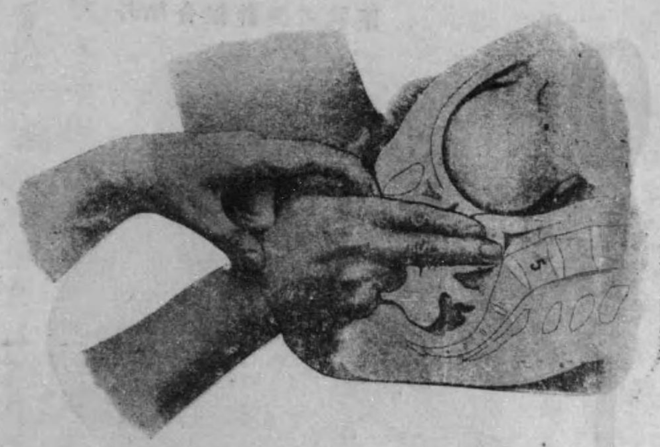


第百八圖

卷尺（帶尺）

第百九圖

對角結合線計測の圖



第二　骨盤内計測

後に内診の條下にて述べん

第三章　内診

第三　内診の方法

先づ妊婦を仰臥せしめ、左右の下肢を胯關節及膝關節に於て輕く屈曲せしめ、股を左右に開かしめ、法に從ひて外陰部を消毒したる後、消毒したる手の示指(又は示中兩指)を以つて内診す可し。

消毒したる手指には、五%石炭酸「オレーフ」油又は五%石炭酸「ワセリン」を塗り、他手の拇指及示指にて小陰脣を左右に開きて後、腟の後壁に從ひて腟内に挿入し、肘を股間に下して骨盤誘導線の方向に深く進み、次の順序に從ひて見落す事となく丁寧に診察す可し。

第二節　内診すべき順序

第一　腟

腟壁粘膜に皺襞の有無。其伸展性如何。瘢痕の有無。

二　腟腔の廣狹。

三　腟穹窿部　妊娠中(又は分娩の初期)に於ては前腟穹窿部に於て、胎兒の下向部を觸るゝが故に先づ。

(一)下向部の「何」なるや。
(二)下向部が移動するや或は固定せしや。
(三)下向部の周圍に胎盤の前置しあらざるやを注意す可し

第二　子宮

一　子宮腟部　既に消失せしや、或は尚保存せるやを見る可し。若し保存せる時は、其長さ、硬さ及形を見る可し。

二　子宮口
(一)形狀
(二)大さ　子宮外口の開大し居るや否や。
(三)子宮口緣　平滑又は裂痕存在。

第三　骨盤の廣狹。

若し産婆の指を薦骨岬に容易に達せしめ得る時は、其の骨盤に狹窄あるものと見做し、對角結合線を計る可し。(第一一九圖)

對角結合線——2——眞結合線

(十三仙米)なり。

第四　外陰部

一　會陰　伸張し易きや否や。

二　(一)陰脣等　着色、浮腫、靜脈瘤、潰瘍、其他の異常なきや

三　(二)腟口粘膜の藍赤色

四　(三)分泌物の有無及其の性質

第三節　內診の目的

一　妊娠の決定(殊に初期診斷)

二　初妊と經產との區別

三　妊娠時期の決定（末期ならば分娩既に開始せるや否や）

四　分娩時の胎兒通過障碍を豫期するや否や　即ち

（一）軟部產道の狀態……

（二）骨盤腔の廣狹……

（三）胎兒の大さ、胎位、胎勢

の診定

以上何れも、外診にて不明の點を、內診により愈明らかにせんとするを目的とす。

第四節　內診時の注意

第一　消毒を嚴重にすべし。

手指及外陰部は、必ず法に從ひて消毒す可し。殊に分娩時には嚴重に消毒す可し。若し、これを守らずして產褥熱等を起したる時は、啻に德義上の罪人たるのみならず、時としては法律上の責を免れ得ざることあるべし。

第二　粗暴なるべからず

內診は必ず物軟かに、靜かに行ふ可し。若し粗暴に行ふ時は內診所見が不明となるのみならず、妊婦を傷くる虞あり。

第三　長時間に亘るべからず

附　雙合診

內診に加ふるに外手を耻骨接合上の腹壁に貼じ、輕く骨盤腔內に向つて壓入し內外兩手の間に挾み、以て觸診する法なり

乙部　診察の結果決定す可き事項＝診斷事項

第一章　妊娠の決定

第一　不確徴（妊婦全身に起る變化）

妊娠ならざる婦人若しくは男子にも來り得る徴候なり。

一　消化器の變化
　(一)食慾不振
　(二)惡心嘔吐
　(三)食物嗜好の變化

二　泌尿器の變化。尿意頻數。

三　皮膚の變化
　(一)顏面の褐色斑
　(二)腹部正中線の着色
　(三)妊娠線

四　神經系の變化
　(一)頭痛、齒痛、關節痛、薦骨痛
　(二)精神の變狀

第二　半確徴（一名疑徴）（妊婦生殖器の變化）

婦人に限り來るも、妊娠以外にも來り得る徴候なり。

一　月經の閉止

但し稀には妊娠中に月經に類する出血を見ることあり。又反對に妊娠ならずして月經の閉止することあり。

二　子宮の變化

(一)大さ　妊娠子宮は膨大す。若し此大さが數回見る毎に妊娠月に相當して益々大となるなれば、これを準確徴とす。

(二)硬さ　子宮は漸次に軟くなりて搗きたての餅の硬度となる

三　子宮雜音

四　外陰部、膣、子宮膣部之等の粘膜は藍赤色に變ず。又生殖器の組織すべて鬆粗とな

り、尚粘液の分泌増加す。

五　乳房（（一）乳暈乳頭の着色を増す　（二）乳腺腫脹す　（三）初乳を分泌す）

第三　確徴（胎兒の生活現象）

妊娠以外には決して來らず、故にこの確徴の中一つにても明確に認め得たる時はこれを妊娠と確定し得。

一　胎兒心音　臍帶雜音

二　胎動

三　胎兒身體の各部分

（を明かに知り得ること。）

以上確徴は妊娠後半期に於て初めて明かに認め得べきものなるを以て、前半期には不確徴と半確徴とのみにより妊娠と否とを診斷せざる可からず。

而して此不確徴と半確徴とのみにても其の數多き時は、其の診斷は割合に確實なり。

▲妊娠早期診斷法

第一　ピスカッエック氏の徴候

妊娠第二ヶ月の頃の子宮に於て、卵子の附着したる部分が他の部分よりも著しく外方に膨隆し、其の部分の組織が他の部分の組織より軟にして、其の兩部分の間に溝の如き境界を生ずるを云ふ。（第九十二圖）

第二　ヘガール氏徴候

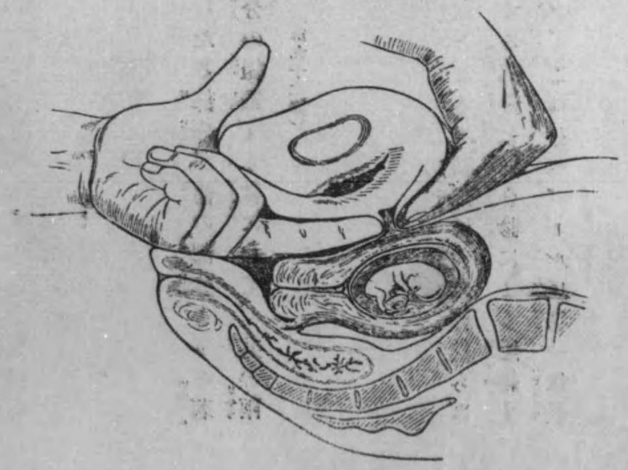
一　ヘガール氏第一徴候

妊娠第三ヶ月の頃に於て、子宮體部は既に柔軟となるも頸部は尚未だ然らざるを以て、此兩者の境界卽ち子宮内口に相當する部分を雙合診により壓縮すれば、この所に組織が殆どなきかの如くに感ず、これをヘガール氏第一徴候といふ。

欠

第百十一圖
ヘガール氏第一徴候

第百十二圖
ヘガール氏第二徴候



閲

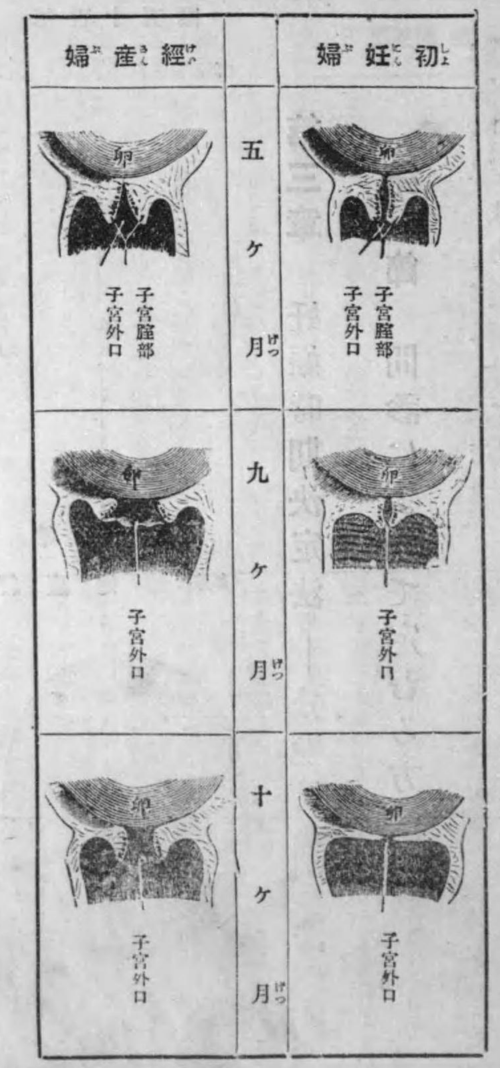
第二十二表　初妊經産の鑑別

	初妊婦	經産婦
(一)乳房	乳體は半球形をなす。 乳頭は短かし、(乳頭及其附近に通常瘢痕なし)。	乳體は嚢狀に弛緩懸垂し、乳體の皮膚に舊妊娠線を認む。 乳頭は長くして弛緩す、(其他哺乳時に受けたる瘢痕を認むる事あり)。
(二)腹部	腹壁の緊張の度强くして、子宮底高さを常とし、妊娠後半期に於て藍赤色の新妊娠線を見る。	腹壁通常弛緩し、初妊婦に比し子宮底低きを常とし、舊妊娠線を認む。
(三)兒頭	第十ヶ月に入るや骨盤上口に固定す。(九十三圖)	第十ヶ月に於ても骨盤上口の上に移動す。(九十四圖)

欠

(四) 外陰部	陰脣繫帶其他に瘢痕を認めず、 腟口閉鎖す。 處女膜の裂傷は其基底に達せず。(五十五圖)	陰脣繫帶(又屢々會陰其他)に瘢痕を有し、 腟口哆開す。 處女膜の裂傷其基底に達し膜の缺損あり。
(五) 腟	腟壁の皺襞に富み、前後兩壁相接す。	腟壁の皺襞少く、腟腔廣し。
(六) 子宮腟部及子宮	子宮腟部は通常經產婦より小にして硬さ一樣、表面平滑、妊娠八—九ヶ月頃に著しく短縮し、十ヶ月に於て全然消失す。(九十三及百十四圖) 子宮口は圓形(又は橢圓形)の小孔にして、其周邊平滑なり、妊娠中に指を通過せしめ得ず。	子宮腟部は大にして硬軟一樣ならず、表面凹凸不平、妊娠八—九ヶ月の頃に多少は短縮すれども其度著しからず、十ヶ月に於ても全く消失せず。(九十四及百十四圖) 子宮口は横裂狀に哆開し、周邊に裂痕を有す、第五ヶ月頃に至れば頸管下端漏斗狀に開き一指を入れ得べく第九ヶ月に及びては頸管全部開きて卵膜を觸るゝ事あり。(百十四及百十六圖)

第百十四圖

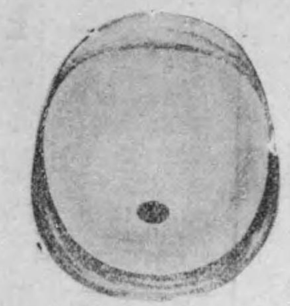


(百十四及百十五圖)

(百十四及百十六圖)

第百十五圖

初妊婦（子宮腟部）



第百十六圖

經產婦（子宮腟部）

第三章　妊娠時期決定法——分娩日豫定法

第一節　問診によりて定むる方法

一　最終月經より計算する方法

最終月經の第一日を妊娠第一日と假定する時は、成熟胎兒の分娩する迄には平均**二百八十日**（四〇週）を要す。この二百八十日を便宜上十分し、其の各の一つを妊娠月とす。即ち妊娠一ケ月は二十八日（四週間）なり。

而してこの二百八十日は太陽暦の九ケ月と四日——七日に相當すれども、便宜上太陽暦の**九ケ月**と**七日**と見做す。即ち通常は、

最終月經の第一日を含む月に九ケ月を加へ、第一日の日に七日を加へて分娩豫定日となす。

但し月に九を加へたる數が十二月を越ゆる時は、九を加ふる代りに三を減ずるを便とす。

二　交接の日より計算する方法

受胎と關係ありと認む可き交接の日の判明せる時は、其の日に太陽暦の九ケ月を加へ（又は三ケ月を減じ）これを分娩豫

定日とす可し。

三、胎動初覺の日より計算する方法

胎動初覺の日は通常五ヶ月の終りなるを以つて、其の日に妊娠月の五ヶ月(二〇週)卽ち太陽曆の四ヶ月と二十日を加へて、分娩豫定日となす。

この方法は甚だ不確實なるものにして、唯最終月經不明の時に參考として之れを用ふ。

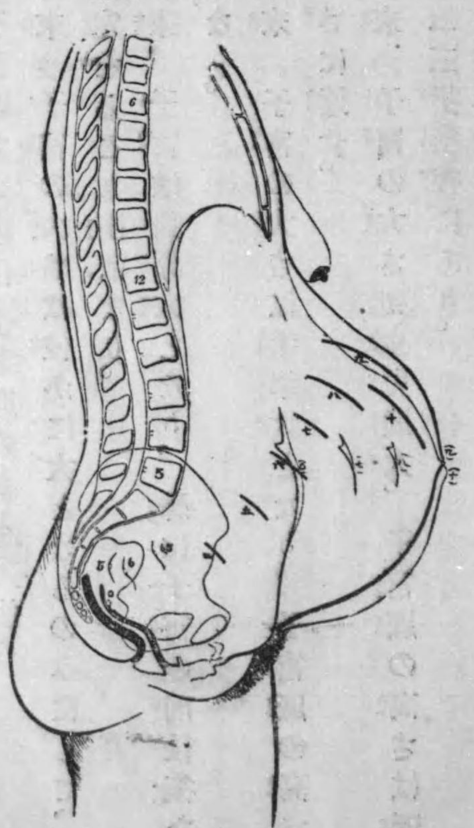
四、子宮底の下降を初めて感じたる日より計算する方法

其日に三週間を加へてこれを分娩豫定日となす。此の方法も甚だ不確實なり。

第二節　外診及內診による方法

第一『胎兒の大さ』殊に『**兒頭の大さ**』胎兒の大さ殊に兒頭の大さによりて、妊娠月數を定め、從つて分娩豫定日を定むる事を得。

第百十七圖
妊娠各月に於ける子宮底・臍窩・子宮腟部



第二　『**子宮の大さ**』殊に『**子宮底の高さ**』其他。

第一ヶ月末　子宮の大さは僅かに大となるのみにして、妊娠と否とを定むること困難なり。

第二ヶ月末　子宮は鶏卵大となり、殊に子宮の前後徑を増すこと特徴なり。

第三ヶ月末　子宮の大さは手拳大となり。子宮底の高さ恥骨接合の高さに達す。

第四ヶ月末　子宮の大さ初生兒頭大。子宮底の高さは既に恥骨接合上二三指横徑にあり。

内診により**胎兒部分**を觸れ、聽診により**胎動**を聽取し得る事あり。

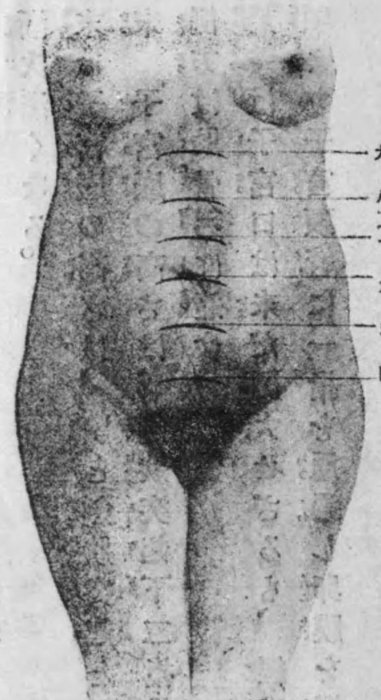
第五ヶ月末　子宮底の高さは、臍下二三指横徑にあり。

五ヶ月の終りより**胎兒心音**を聽き、妊婦は胎動を自覺す。

第六ヶ月末　子宮底は臍高。外診により**胎兒部分**を區別し得。

第百十八圖

妊娠各月子宮底の高さ



第七ケ月末　子宮底の高さは臍上二三指横徑にあり。臍窩は此月より漸次淺くなる。

第八ケ月末　子宮底の高さは、臍と劍狀突起との中央にあり

第九ケ月末　子宮底の高さは、劍狀突起下二指横徑に及び、子宮底の側方は肋骨弓に達す。

初妊婦に於ては子宮口は未だ開大せざるも、經產婦にありてはこの月頃より子宮頸管に一指を通過し卵膜を觸れ得る事あり。

第十ケ月末　子宮底は下降し再び八ケ月と同じ高さとなる。然れどもこの時は著しく前方に突出し、腹圍は臍窩に於て八十五仙米に達す。

第二十三表　妊娠八ケ月と十ケ月との鑑別法

	八ケ月	十ケ月
腹部視診	(一)腹部突出の度少し	(一)腹部著しく前方に突出し腹圍八十五仙米以上あり 但し經產婦に於ては此形狀の差違は初妊婦程に著しからず
腹	(二)臍窩尚保存す (三)心窩部腹壁は緊張の爲め厭	(二)臍窩は全く消失す(或は突出する事あり) 但し經產婦に於ては消失は著しからず (三)心窩部腹壁は弛緩の爲め壓

部	觸	診	内
入し難し（呼吸障碍、胃の障碍強し）	（四）觸診の際子宮の收縮の度弱し	（五）胎兒殊に兒頭小なり、兒頭は骨盤上口より上方に於て移動す	（六）子宮腟部は尚ほ保存せられ
入し易し（同上の障碍多くは減少す）但し經產婦は凡て初妊婦よりも強く著し	（四）觸診の際子宮の收縮の度著し	（五）胎兒殊に兒頭大なり、兒頭は骨盤上口に固定す但し經產婦にては未だ固定せざるも八ケ月の頃よりは動き難し	（六）子宮腟部は既に消失す

診
凡そ一指節程突出す但し經產婦に於ては尚保存せらるゝも八ケ月に比して短かし

第二十四表　妊娠月數に一致せざる子宮底の高さ

高き場合	低き場合
胎兒發育過大	胎兒發育不良
骨盤端位	横位
多胎妊娠	——
羊水過多症	羊水過少症
葡萄狀鬼胎	死亡胎兒

第四章　胎位胎向の診斷法

甲　胎位

一　直位

子宮底部及耻骨接合直上部に臀部若しくは兒頭を觸る。

二　横位、斜位

兒頭若しくは臀部は側腹に觸る。

乙　胎向

縱位に於ては兒背の方向により定め、横位及斜位にありては兒頭の方向によりて定む。

第五章　胎兒數の診斷法

第二十五表

	單胎	雙胎
(一)子宮及腹部の大さ	妊娠月數に相當す	妊娠月數に比して大
(二)胎兒の大さ(殊に兒頭の大さ)	妊娠月數に相當す	妊娠月數に比して小
(三)兒頭、臀部、兒背	各々一つを限り觸る	何れかを二つ觸れ得
(四)小部分	一側に限る	數ケ所に觸る
(五)心音	一ケ所に限り聽取	二ケ所に聽取

第六章　胎兒生死診斷法

第一節　胎兒生活現象

(一)胎兒心音(時には臍帶雜音)を聽取す。

(二)**胎動を視**、觸れ、或は聽取す。
(三)**胎兒部分**を明らかに觸知し得。
(四)**子宮**(及胎兒)は妊娠月數に相當として漸次に增大す。

第二節　妊娠中に於ける胎兒死亡徵候

一　**產婆の外診によりて知る方法**(他覺症)

(一)**胎兒心音**を數回注意深く聽取せんとするも之を聽取し得ざること。

(二)**胎動**も如何にしても認め得ざること。

(三)**胎兒の硬さ**及び子宮の硬さが軟となること。

(四)**子宮**の發育が停止するか又は却て縮小する事。

(五)乳房弛緩し小となる、初乳は(減じ若しくは)失ふこと。

(六)外陰部より血樣又は肉漿樣の排泄物を出す事あること。

二　**產婆の問診によりて知る法**(自覺症)

(一)妊婦**胎動消失**を自覺す。
(二)**下腹部に冷感**あり。又は腹內に異物の動くが如く感ず。
(三)**違和・倦怠・食慾不振・惡心・惡寒・呼吸困難**等を訴ふることあり
(四)妊婦に梅毒其の他重き疾病あるか、或は外傷を受けたる後に於ては、胎兒死亡せるやを疑ふ可し。

第三編　妊婦の攝生法

妊娠は疾病にあらず、生理的の生活現象なるが故に、妊娠中の攝生法も亦平常の攝生法と異ることなし。

但し如何に生理的とはいへ、其身體に急激偉大の變化を起し居るゆへ、平時に比すれば僅かなる不攝生も種々の異常を起し易きを以て、妊娠中は平時よりも一層注意して攝生を守る可し。

而して其攝生の要點は平素の生活の有樣を多く變ぜずして只何事も其度を過ごさゞる樣なすにあり。

第一章　運動

一　**肉體的の運動**は適當に行ふ可し。

(一)**仕事**　日々の業務は平常慣れたるものは妊娠七、八ヶ月の頃迄之を行ひて可なり。只平常よりは控え目になすを要す。

洗濯張物等は平素慣れたる者には少しはよろし。

長時間裁縫等の坐業をなすは宜しからず。

去ればとて常に臥床するは却て有害なり。

(二)**歩行と乘物**　郊外散歩等は氣候のよき時に適當に行ふを宜しとす。

但し長時間の歩行、凹凸の道を馬車人力車等にて行くは不可なり。

汽車電車は短距離なれば差支なし、自働車は大に注意を要す。長距離旅行は止むを得ざる場合の外は行はざるをよし

とす。是非旅行の必要あるならば五、六、七ヶ月頃は障碍比較的少なし。但しこの間とても全く安全とはいひがたし。又前回の妊娠中に長距離を旅行して無事なりしとて、これを以つて今後の妊娠中の標準となす可からず。若し疑はしき時は醫師の指圖に從ふ可し。

(三)**有害の動作**　妊娠中は重き物品を運搬若しくは上下す可からず。

其他腹壓を高むるが如き動作をなす可からず。例へば高き處に手を伸して物品を取らんとするが如きは宜しからず。階段の昇降を頻繁になす可からず、從て二階住居は不可なり。

殊に下腹部に緊張又は疼痛を感じたる時或は胎兒の下降を感じたる時は、成る可く運動を少なくし且外出等を避く可し。

房事は妊娠中全く禁ずるを理想とすれども、普通は其の度を節約し又粗暴なる動作を禁じ、第八ヶ月以後に於ては之を絶對に禁ず可し。

二　精神的の仕事

(一)**讀書**　平常讀書に慣れたる婦人は妊娠中適宜に讀書するも宜し、只妊娠の終三ヶ月は可成精神を勞せざる樣す可し。妊婦は常に愉快に暮す可しといへども、あまりに喜怒哀樂の情を激せしむるが如き事物は避く可し。

例へば「小說」を耽讀するは不可なり、或は「劇場」等に入るは只に感情を激せしむるのみならず、雜鬧中の不潔

の空氣を吸ひ長時間坐す等の害あり。

(二)**集會** さればとていづこにも出でずして一人淋しく室内に籠居するもよろしからず。故に少人數にして居心地よき會合(例へば同級會等)に出席するはよろし。

(三)**杞憂** 妊婦に分娩の危險を語るはよろしからず、若し分娩につき杞憂し居らば醫師の診察を乞はしむ可し。又家庭の心配事等を妊婦の耳に入れざる樣なす可し。

(四)**睡眠** 睡眠は十分にとらしむ可し。

第二章 清潔

(一)**身體の清潔** は殊に妊婦に必要なり。卽ち少くとも一週間に一回は入浴せしむ可し。夏期は成る可く一日一回の沐浴をとらしむ可し。

但し熱き湯又は長時間の沐浴は害あり。浴後ば腰部又は腹部を冷さぬ樣に靜かに休息するをよろしとす。

坐浴、冷水浴、海水浴等は禁ず可し。

(二)**外陰部** 不潔なる時は、清潔なる溫湯にて洗ふ可し。

(三)**乳房** 殊に乳頭は常に清潔ならしめ、若し不潔なる時は、溫湯又は「アルコール」等にて拭ふ可し。乳頭短かくして哺乳に適せざる時は、妊娠中よりこれを摘みて延す可し。

(四)**衣服、寢具** 等も常に清潔に保ち、時々日光に晒す可し。

第三章 衣服

(一)**衣服** は季節に應じ溫保の目的に適する丈けに止め、なる

べく寛濶なるを要す。殊に胸部、腹部等を緊縛せざる様注意すべし。

(二)**腹帶**　は正規妊娠殊に初妊婦に於ては殆ど其必要を認めず然れども幅廣き布を以て適度に纏ふ時は次の利益あり。

(1)腹部を保溫し　(2)子宮と胎兒の位置を保護し

(3)歩行及動作を便ならしむ。

次の場合には適當の腹帶を要す。

(1)懸垂腹　(2)羊水過多症　(3)不正なる胎位を矯正したる後

(4)産褥の初期

第四章　食物

(一)**種類**　食物は平素慣れたる物の中より消化し易く滋養に富めるものを選ぶべし。

(二)**分量**　適宜の分量を攝るべしといへども、食慾の進みたる時は消化器を害せざる限り平素より多く食するも害なし。時に一日四回に分食するもよろし。

(三)**禁忌**

(1)不消化の食料或は強き藥味料(芥子、山葵、山椒、胡椒、蕃椒、生薑等)は多く食す可からず。

(2)強き酒、濃き茶又は濃き珈琲は用ひざるを宜しとす。

(3)便秘をきたし易きもの、或は風氣を釀し易きものは多く用ふ可からず。

(四)**便通**　妊娠中は通常便秘し易きものなるが故に其便秘ある時は、毎朝一碗の清水を飲み毎日同時刻の頃に上圊せしめ、

便通の習慣をつけおく可し。又野菜、果物等を取り適當の散歩をなす時は便通を調へ得べし。如何にしても通利なき時は浣腸を可とす。浣腸効なき時は醫師の指圖を乞ふべし。醫師の命なく濫りに下劑を用ふる時は流産等の虞あり。

第五章　住居

妊婦の室は光線の射入及換氣をよくし、適當の溫度を保たしむ可し。宅地は適當に乾燥し飲料水も宜しきを選ぶべし。

大正七年八月二十九日印刷
大正七年九月　五　日發行

正價金七拾錢
送料金八錢

著發者　佐久間兼信　東京市神田區三崎町三丁目一番地
發行者　東京助醫女學校　電話本局五八二・振替貯金東京三九九一一
發行所　加藤保　東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷人　文明社　東京市神田區三崎町三丁目一番地　電話本局三三二六
印刷所　南山堂書肆　東京市本郷區龍岡町三十四番地　電話下谷四一七八・振替貯金東京六三三八

特約賣捌

86
142

56
142

終